

生産工程をデータ化

十勝全体で食と農を柱とした産業振興を目指す「フードバレーとかち」は、㈱日本能率協会コンサルディングと連携し、帯広市の畑作農家2戸で生産工程のデータ管理に関する実証試験を行っている。20日には、畑作70軒を経営する(有)道下広長農場で取り組み内容の説明があった。

フードバレーとかち



コンサル会社の担当者と話し合う道下さんと長男の洋太さん（帯広市で）

収量や効率性向上へ

コンサル会社と連携 畑作2戸で実証試験

生産工程をデータ化して管理する手法は、同コンサルディング社の顧客の大半を占める製造業では一般化している。第1次産業ではまだ使われておらず、今回の実証試験となった。同社でも農場でのデータ収集作業は初めて。

同社が提供するシステムの柱は二つ。一つは「作付け・作業計画・管理」に関するもので、作付けが収量向上のための組み合わせになっているか、単価向上のためのタイミングか、作業機械や作業員を効率良く活用しているか——などを確認する。もう一つは「成長管理」で、どのような状態の時にどんな手を打ったのか、その結果どうだったのか——といった対応ノウハウを蓄積する。

同農場代表取締役の道下公浩さん(49)は「生産工程をはじめ、気象情報

から全てのデータを蓄積してどこに無駄があるか誰でも分かるようにするのが目的。作業を指示するにしても経験だけでなく、根拠を示すこともできる」と期待。また「データ蓄積は将来、財産になり得る」と話した。

帯広市産業連携室の鈴木新一参事は「今後、十勝管内で導入希望があればコンサル会社とも相談して拡大していきたい」と話している。